

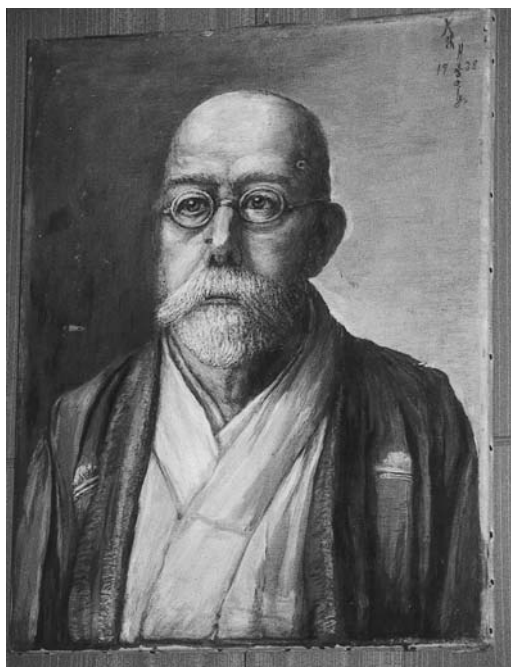
ドイツの切手に現れた科学者、技術者達(28)

ロベルト・コッホ

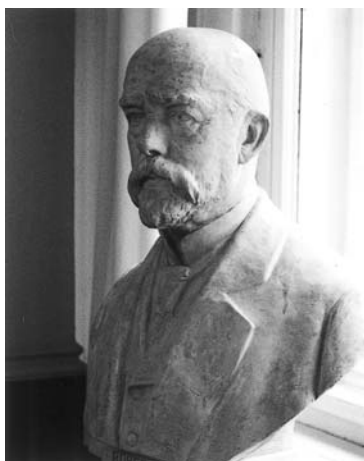
Scientists and Engineers in German Stamps (28). Robert Koch

筑波大学名誉教授 原田 馨
KAORU HARADA

Professor Emeritus, University of Tsukuba.



記念室に掲げられている日本の着物姿のコッホの油絵



コッホの胸像

ロベルト・コッホ

ロベルト・コッホ (Robert Koch, 1843-1910)、ドイツの医師、生物学者、細菌学者。近代細菌学の祖、多くの病原菌の発見者。

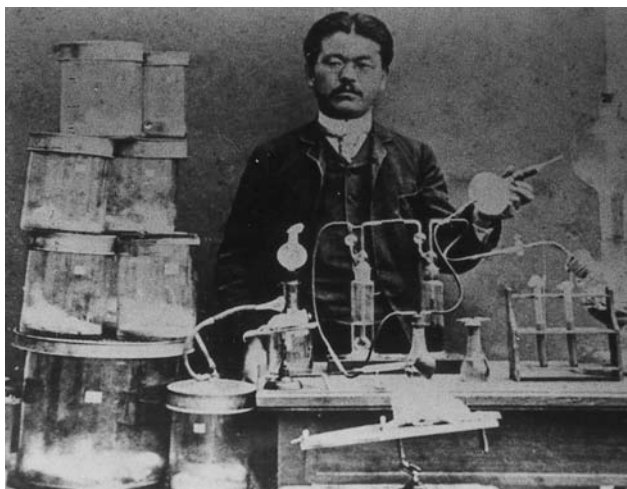
19世紀のドイツは続々と世界をリードする生物学の著名な学者を輩出した。それらの生物学者はシュライデン (Matthias Jakob Schleiden, 1804-1881)、シュヴァン (Theodor Schwann, 1810-1882)、ミューラー (Johannes Muller, 1801-1858)、デュ・ボア・レイモン (Emil Du Bois-Reymond, 1818-1896)、コッホ、ベーリング (Emil von Behring, 1854-1917)らであった。医学を含む生物学分野の研究報告の数は19世紀前半に他の欧州諸国に追いつき、19世紀後半には世界をリードするまでになった。この間に近代生物学の強固な基礎を築き、大きな成果を達成した。生物学における発展は他の科学の発展とも対応している。

コッホは1843年クラウスタール (Klausthal) に生まれ、1866年優れた成績でゲッチンゲン大学を卒業後、医師として病院医、軍医として勤務した。彼は探検家になりたかったが妻に反対され、1872年ヴォルシュタイン地方の保健技師となった。当時家畜の伝染病が流行していたが、彼はこれについて調べ血液の中に病原菌が存在することを発見した。

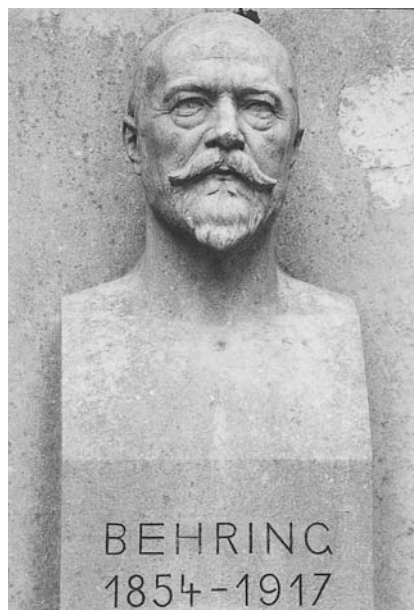
コッホは微生物学の大きな領域を開拓して現代の細菌学を作り上げた生物学者である。1882年に結核菌発見、1885年ベルリン大学衛生学教授となり、1891年には伝染病研究所 (ロベルト・コッホ研究所) 所長となり、熱帯病の研究 (マラリア、牛疫、回帰熱、ペストなど) を行った。同様な研究をした人にフランスのパスツール (Louis Pasteur, 1822-1895、微生物学者、パスツール研究所初代所長) がいる。コッホは1905年、結核菌に関する研究によりノーベル生理学・医学賞を受賞した。また1908年に世界一周の途次、日本にも立ち寄った。コッホの病原菌確

認法は微生物研究の基本となり、世界中で用いられている。コッホに学んで啓発を受けた医学者には日本の北里柴三郎(1853-1931、熊本県出身)がいる。北里の研究にはノーベル賞クラスのものがあると云われたが、ドイツから帰国後は伝染病研究所設立などに追われ、研究のための十分な時間がなかったのが残念である。コッホの助手で北里の同僚であったベーリングは血清療法(特にジフテリアに対する)の研究により、コッホより早く1901年第一回ノーベル生理学・医学賞を受賞した。

※本稿に掲載の写真は、著者の撮影によるものである。



1885年ドイツに留学し、コッホのもとで研究を行った北里柴三郎。当時のリーダー的医学者であり、人格的にも素晴らしい学者であった。



マールブルク、エリザベート教会前にあるベーリングの胸像



コッホ広場にあるコッホの大理石像



ベルリン、コッホ広場の標識



医学微生物および伝染病研究所の正面玄関



コッホの記念室

ドイツの切手に現れた科学者、技術者達 (28) ロベルト・コッホ



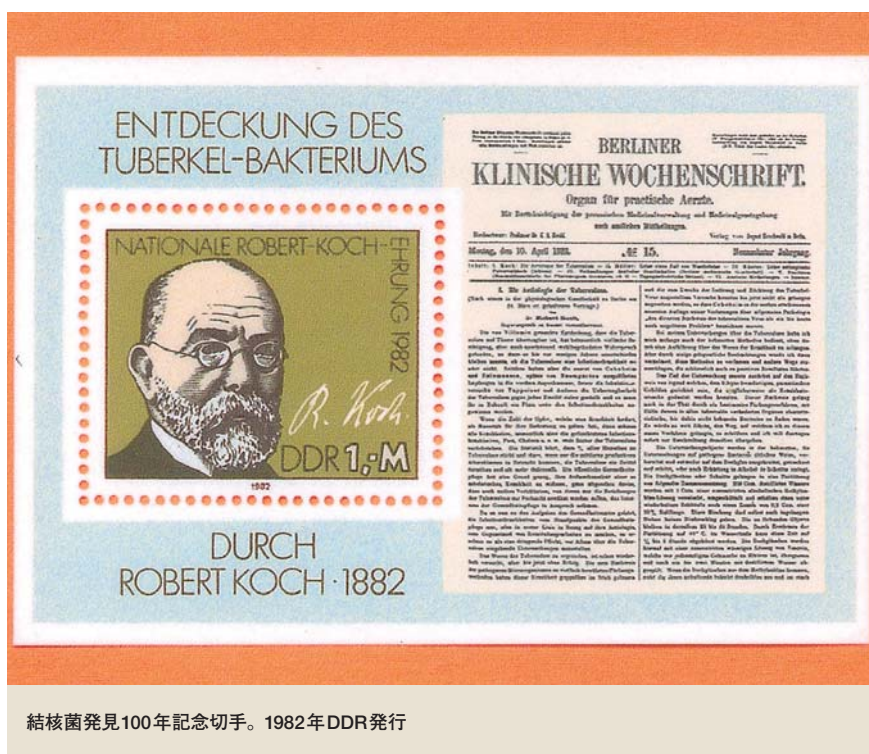
シャリテ設立250年記念切手。1960年DDR発行



結核菌発見(1882年)100年記念切手。
1982年西ドイツ発行



コッホ没後50年記念切手。
1960年ベルリン発行



結核菌発見100年記念切手。1982年DDR発行



ロベルト・コッホ研究所の記念板



結核菌発見により与えられたノーベル生理学・医学賞のコピー

表紙写真

イワウチワ(岩扇属) (イワウメ科イワウチワ属)

イワウチワは、春の山ではよく見かける草丈5~15cm程度の高山植物です。イワカガミと区別できない光沢のある硬い葉に、鮮やかなピンクの花を付けます(白い種もあります)。これも他の花同様につぼみ~花が小さい時期は色が濃く、花の成長とともに薄い半透明なピンクのように変わっていきます。地表を覆いつくすようなイワウチワの群落は大変見ごたえがあり、何回も々々も同じような写真を撮らせてしまいますが決して飽きないものです。これは富山県の僧ヶ岳登山中の一カットです。(写真・文 北原音作)

あけましておめでとうございます。

読者の皆様、ご執筆頂きました著者の皆様には、よい年をおむかえになられたことと、心よりお慶び申し上げます。

昨年11月のデフレ宣言以来、日銀による量的緩和策をはじめとする様々な対策が取られていますが、デフレ解消の兆しが見られない中で、「庚寅(かのえとら)」の正月を迎えることとなりました。

「庚」は「更(あらた)まる」という意味で、「寅」には、「動く」という意味があります。本年は、経済面では冬に終りを告げ、新たな成長へと向かう気運溢れる年となるはずだと。

ケミカルタイムズは、昭和25年3月の創刊以来、本年で六十周年を迎えます。これも偏に皆様のご愛顧の賜物と深く感謝申し上げます。今後とも分かり易く、お役に立つ情報提供となる誌面作りを心がける所存です。

本誌では、ミルクオリゴ糖、コトスライドガラス、コウモリの今と昔ならびにトランス脂肪酸に係わる銀イオンクロマト等を掲載させて頂きました。

本年が、皆様にとりまして明るく活気の満ちた年となりますよう、お祈り申し上げます。

(築島 記)

編集後記



関東化学株式会社

〒103-0023 東京都中央区日本橋本町3丁目2番8号
電話 (03) 3279-1751 FAX (03) 3279-5560
インターネットホームページ <http://www.kanto.co.jp>
編集責任者 築島 功 平成22年1月1日 発行

「無断転載および複製を禁じます。」